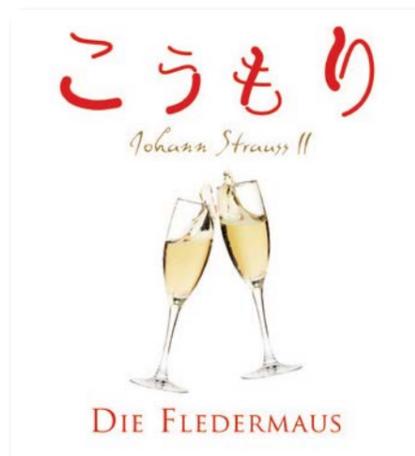


東京芸術劇場シアターオペラvol.7 **J.シュトラウスⅡ 喜歌劇『こうもり』全3幕** 字幕付原語&一部日本語上演

2月20日(木) 18:30開演 コンサートホール 詳細はP12へ

ウィーンの『こうもり』東京に舞い降りる



オーストリアの都ウィーンでは、年明けから2月のカーニバルまで舞踏会が盛んに開かれる。踊るのが好きで、音楽が好きなウィーン子だからこそ、「舞踏会」といういざさか古めかしい催しが、今なお健在なのだろう。

そんな舞踏会をテーマにしたオペレッタが『こうもり』。1874年に初演されたのだから、もうかれこれ150年ほど前の作品なのに、今なお絶大な人気を誇っている。

その理由は、1つには底抜けに楽しいから。「オペレッタ」は、喜劇を主とした軽めのオペラという意味だが、『こうもり』はそんなジャンルの代表選手である。何しろ舞台上では華やかな舞踏会が繰り広げられ、艶っぽい恋物語や、ドタバタの取り違え劇が次々とおこるのだ。さらにそんなストーリーを華やかに彩るのが、ヨハン・シュトラウス2世(1825-99)の音

楽である。ワルツやポルカといった、舞踏会には欠かせないダンス音楽でキャリアを築いた作曲家だけのことはあって、『こうもり』でも身も心も浮き立つようなダンス音楽が万華鏡のように花開く。

そんな『こうもり』をウィーンでの伝統的な上演そのままのスタイルで上演したって、それだけで素晴らしいひと時となることは請け合いだ。だが、もう少し違う楽しみ方も考えられないか。21世紀の日本で、ヨーロッパと日本のキャストから成る公演をおこなうにあたっては、そこに幾つもの工夫を凝らして『こうもり』の新たな魅力をあぶりだすことだって可能だろう。そして…これは歴代のシアターオペラの根底に脈打つ問題意識だが…、単なる輸入品でも借り物でもない日本ならではのオペラを発信してゆく姿勢こそ、この国でオペラを未来に繋げてゆくために必要な条件なのである。

というわけで、このたびの『こうもり』の舞台はずばり、現代の日本。国際化が進む中で、オーストリア人の証券マンの夫と、元モデルの日本人の妻がいて、そこにモードデザイナーが忍び寄りてきて…という、どこかのハイソサエティで今日も繰り広げられているようなリアルな設定から、物語は始まる。ただしこれは突拍子もない思いつきなどではなく、そもそも『こうもり』のオリジナルの台本ではこの作品が誕生した同時代のウィーン近郊のどこかの街が舞台となっているのだ。つまり、当時の観客にとっ

ては舞台上の出来事とはいえ、きわめてリアルな要素の入ったオペレッタだった。

しかも『こうもり』は、単なる爆笑劇ではない。実はこの作品が初演された前年の1873年、都市改造や万国博覧会といった華やかな出来事が続き、沸きに沸いていたウィーンの社会は、想定外の事件に見舞われる。株が大暴落し、多くの投資家が一夜にして富を失うこととなったのだ。右肩上がりの好景気が続く中で、未来永劫幸せな日々が続くと思っていたウィーン子は、突然の事態の前に茫然と立ち尽くすだけだった。

『こうもり』は、そんな彼らを慰めるために作られた作品であるといっても過言ではない。第1幕で酒瓶を片手に歌われる「どうしようもないことを忘れられれば／それで幸せ」などといったフレーズは、凡百の応援歌などよりもよほど、深い失望に晒されたウィーン子の心に寄り添うものであったろう。しかもこの歌詞を彩る音楽とはいえば、とろけるように甘く切ないワルツの調べときている。

…今なお様々な不安の影が拭えない現代の日本。そのただなかにあって幕をあける『こうもり』は、きわめて私たちの物語なのだ。そしてウィーンで舞踏会まっさかりの2014年の2月、シュトラウス2世の作ったしなやかでしたたかな音楽に乗せて、光も影もあるウィーンの『こうもり』が、東京に舞い降りる。

文：小宮正安 (ヨーロッパ文化史研究者、シアターオペラ『こうもり』日本語台本・字幕担当)

石川県立音楽堂×東京芸術劇場 共同制作公演
東京芸術劇場シアターオペラvol.7 『こうもり』全3幕
2月20日(木) 18:30開演 コンサートホール
指揮：ハンス・リヒター
管弦楽：東京交響楽団【東京】、
オーケストラ・アンサンブル金沢【金沢】
合唱：武蔵野音楽大学(合唱指導：横山修司)【東京】、
こうもり特別合唱団(白山合唱連盟・コロカメリア、
武蔵野音楽大学OB・OG合同合唱団)【金沢】
芸術アドバイザー：メラニー・ホリディ
演出：佐藤美晴 脚本：アンティ・キャロン

金沢公演
2月15日(土) 石川県立音楽堂コンサートホール
主催：公益財団法人石川県音楽文化振興事業団、
東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)、公益財団法人東京交響楽団
助成：平成25年度 文化庁 劇場・音楽堂等活性化事業(共同制作支援事業)

 ハンス・リヒター (指揮)	 ペーター・ボートン アイゼンシュタイン (証券ディーラー)	 小川里美 ロザリンド (日本人の妻)	 小林沙羅 アデーレ (家政婦)	 セバスティアン・ハウプマン ファルケ (証券ディーラー)	 新海康仁 プリント (日本人の弁護士)
 妻屋秀和 フランク (警部)	 タマラ・ゲラ オルロフスキー (イベントプロデューサー)	 ジョン・健・ヌット アフレッド (ファッションデザイナー)	 西村雅彦 フロッシュ (警部補)	 メラニー・ホリディ 2幕のスベシャルゲスト (芸術アドバイザー)	 佐藤美晴 (演出)

芸劇&読響 **0才から聴こう!!春休みふれあいコンサート**

3月25日(火) 13:30開演 / 15:30開演(2回公演 / 入替制) コンサートホール 詳細はP14へ



指揮：北原幸男
ナビゲーター：中井美穂
ソプラノ：清水理恵
管弦楽：読売日本交響楽団

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
助成：平成25年度 文化庁 劇場・音楽堂等活性化事業

家族で思い出を作る、楽しいコンサート

子供たちの春休み期間は、大人にとっても楽しい思い出作りができる貴重な日々。普段はなかなかクラシックのコンサートに行けないけれど家族そろって楽しみたいという方も多く、その一方で子供ができてコンサートから足が遠のいてしまった方、小さな子供は預けなくてはいけないので楽しめないという方もいる。そうした声に応えるのが、0才児も一緒にホールへ入って音楽が聴ける好評企画『春休みふれあいコンサート』だ。

クラシック・コンサートは6才未満の乳幼児へ入場制限をしているものが多く、最近では一時預かり所などを設けているケースも増えてきたが、まだまだ少ないのが事実。それだけに「0才から聴こう!!」というタイトルは心強く、こうしたコンサートを待ち望んでいた音楽ファンも多いだろう。

東京芸術劇場でのマチネーシリーズ(週末午後のコンサート)等で名演を繰り広げている読売日本交響楽団が、楽しいマーチや動物たちの鳴き声が聞こえてくる曲、素敵なお歌が聴けるオペラのアリアなどを次々に演奏してくれる。欧米各国で活躍する指揮者の北原幸男や、藤原歌劇団のステージなどで軽やかな歌声を聴かせている清水理恵が出演。さらにはフリーアナウンサーの中井美穂が、音楽やオーケストラについてわかりやすく紹介してくれるのもうれしい。

子供たちがオーケストラに初めて接し、お稽古ごとを始めたり、将来への道を決める大事な機会になるかもしれないコンサート。お孫さんと一緒に音楽を楽しみたい方たちや、ご近所の仲良しファミリーを誘い、みんなで幸せな時間を過ごすのはいかがだろう。

東京芸術劇場&ミュゼ川崎シンフォニーホール共同企画 **第3回音楽大学フェスティバル・オーケストラ 演奏会**

3月28日(金) 19:00開演 コンサートホール 詳細はP14へ



指揮：ラドミル・エリシュカ
管弦楽：音楽大学フェスティバル・オーケストラ
(首都圏8音楽大学選抜オーケストラ)
参加音楽大学：国立音楽大学、昭和音楽大学、
洗足学園音楽大学、東京音楽大学、
東京芸術大学、東邦音楽大学、
桐朋学園大学、武蔵野音楽大学

スメタナ / 連作交響詩『わが祖国』から
「高い城」「モルダウ」「シャルカ」
ドヴォルザーク / 交響曲第9番「新世界より」
※3月29日(土) 15:00開演 ミュゼ川崎シンフォニーホール

主催：音楽大学オーケストラフェスティバル実行委員会
東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
ミュゼ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)
助成：公益財団法人ローミュージックファンデーション
sarah一般社団法人私的録音補償金管理協会
平成25年度 文化庁 劇場・音楽堂等活性化事業

若き音楽家たちと話題の名匠が新時代を開く

8つの音楽大学で学ぶ若い世代の演奏を聴き、その新鮮さと情熱を感じながら将来の音楽シーンに思いを馳せることができる「音楽大学オーケストラ・フェスティバル」。2013年は11月~12月に開催され、各大学が個性を打ち出した演奏で新しい歴史を作った。しかし、その歩みはさらに可能性を広げる。日本でもトップクラスと言える8つの大学から選抜されたメンバーが集結してスーパー・オーケストラを結成し、ひとつの伝説を作り上げようとしているのだ。第3回「音楽大学フェスティバル・オーケストラ」は、まさに未来のプロ音楽家たちによる演奏を“ひと足早く”味わうことができる、大きなチャンスだと言えるだろう。

演奏されるのはスメタナとドヴォルザークの名曲。そして指揮台に登場するのは、音楽

ファンに「世界にはまだ、こんなマエストロがいたのか!」という驚きと尊敬をもって迎えられたチェコの名匠、ラドミル・エリシュカ。1931年生まれというベテランでありながらも日本では数年前まで存在をほぼ知られず、NHK交響楽団や札幌交響楽団などに客演すると話題を呼び、追っかけファンまで出現したというマエストロだ。「滋味あふれる」と形容したいその音楽が若い世代の音楽家たちにどのような影響を与え、聴き慣れた名曲がどのように響くのだろうか。

そうした可能性も含め、これまで音大生の演奏にあまり関心がなかった人にも注目されるコンサートになるはずだ。「一途でも志を持った演奏」と聴衆からも絶賛の声が寄せられるその音楽は、ここでしか聴けないのだから。